

<翻訳> ヒエロニムス著「翻訳の最高種について」 (書簡 57 「パンマキウス宛の手紙」)

(Hieronymus, Epistula 57, *Ad Pammachium: De Optimo Genere Interpretandi*)

高畑 時子

Tokiko TAKAHATA

Letter 57 of St. Jerome : *To Pammachius on the Best Method of Translating*

(Epistula 57, *Ad Pammachium: De Optimo Genere Interpretandi*)

— A Japanese Translation —

< 凡 例 >

底本として主に、Migne, Jacques Paul, *Patrologia Latina*, Vol.22, 1859 (Paris) (Marlowe, Michael, <http://www.bible-researcher.com/jerome.pammachius.html> を参照)を用いたが、一部 Bartelink, G.J.M. Hieronymus, *Liber De optimo genere interpretandi* (Epistula 57), Ein Kommentar, in: *Mnemosyne, Bibliotheca Classica Batava*, Leiden, 1980 も参考にした。Bartelink 版など Migne 以外のテキストを採用した箇所はそうのように示した。

また、翻訳に際し、以下の近代語訳を参考にした。Robinson, Douglas, *Western Translation Theory : from Herodotus to Nietzsche*, 2nd ed., 2002 (Manchester: Routledge), p.22 ~ 30 (抄訳)。Davis, Kathleen, Jerome, Letter to Pammachius, in : Lawrence Venuti ed., *The Translation Studies Reader*, 3rd ed., 2012 (London: Routledge), p. 21 ~ 30. Schaff, Philip and Wace, Henry ed., *A Select Library of Nicene and post-Nicene Fathers of the Christian Church: Second series, Translated into English with Prolegomena and Explanatory Notes*, V. 6, St. Jerome : Letters and Select works (Grand Rapids, Michigan: WM. B. Eerdmans Publishing Company) [1979, reprinted], p. 112 ~ 119. Bibliothek der Kirchenväter: Eine Auswahl patristischer Werke in deutscher Übersetzung (<https://www.unifr.ch/bkv/kapitel3348.htm>).

翻訳部分において、() は訳者による補足か注釈、「 」は引用句、『 』は引用句内の引用句、< >はその中の引用句、[] は引用箇所を示す。

長母音の表記は原則として省略するが、日本語表記の慣例に従ったものもある (例：ウ

ルガータ)。

聖書の引用箇所および聖書にあるラテン語表記の人名や地名等の固有名詞はラテン語の読み方ではなく、新共同訳聖書での表記に合わせた。また、その他のラテン語表記の人名や地名等の固有名詞は、日本での一般的な呼び名で表記した(例: アエギプトゥス→エジプト)。

聖書関連の引用については、書名に『 』を付けていないが、その他の古典作品には『 』を付けた。

＜ 書 誌 解 題 ＞

ヒエロニムス (Eusebius Sophronius Hieronymus, 341 ～ 347 年頃～ 419/420 年、英名: 聖ジェローム Saint Jerome) は、古代末期のラテン系キリスト教神学者で、アウグスティヌスなどと並ぶ四大ラテン教父の一人とされ、聖人の一人でもある。ローマ帝国の属州ダルマティアの都市アクイレイア近郊のストリドンで生まれた。最初はキリスト教にはあまり関心を持たず、12 歳の時にローマへ行って修辞学や文法学を学んだ後、ギリシア語などの外国語を習得してガリアや小アジアへ赴き、哲学などの研究を行った。そのため、ヒエロニムスはギリシア・ラテンの古典文学およびギリシア哲学研究と語学に秀でて、ラテン教父の中では最も教養に優れた人物であったと伝えられる。洗礼を受けてキリスト教徒となったのは、360 年頃、ローマへ行ってからであった。372 年頃、小アジア経由で北シリアに向かって旅に出たが、翌年、アンティオキアで重病に罹患し、その病床の夢の中で「汝はキケロの徒にてキリスト教徒にあらず」という神の声を聞いたことがきっかけでキリスト教に目覚めた。[書簡 22: 30 参照] それまでの文学や哲学など世俗の研究から離れて隠修士として聖書研究に没頭し、沢山の隠修士の住むアンティオキア東南にあるシリアのテーバイドとして知られるカルキス砂漠でヘブライ語も学んだ。

382 年以降、ローマへ戻り、ローマ教皇 Damasus 一世 (在位 366 ～ 384 年) に秘書として仕えて聖職者の叙階を受け、その命で聖書をラテン語に翻訳し始めた。388 年頃に再びパレスティナへ向かい、イエスの生誕地ベツレヘム近くの修道者独房で余生を過ごし、そこで 405 年、計 18 年もの歳月をかけた聖書のラテン訳「ウルガータ聖書」を完遂させた。また沢山の聖書の註解書や、スエトニウスを模してキリスト教作家の伝記集成『著名者列伝』(De Viris Illustribus) を執筆し、エウセビオス著『年代記』やオリゲネスの『説教集』なども翻訳した。論争好きで、ペラギウス派を批判したり、オリゲネスを弾劾して異端者の烙印を捺し、親友ルフィヌス (Tyrannius Rufinus, 345 年頃～ 410 年頃、エウセビオス著『教会史』など多数のギリシア語の神学書をラテン訳した修道士) とさえも対立し

た。極度の禁欲生活の中で学問に没頭する中、東方神学を西方教会へ導入した。アウグスティヌス以降、古代ラテン世界のキリスト教界では第二位の著作の多さを誇り、ラテン世界に多大な影響を与えた。

本作品は、150 余篇あるヒエロニムス書簡集の第 57 番の書簡で、ヒエロニムスの友人の、同じく聖人の一人である友人パンマキウスに宛てられた手紙である。395 年から 396 年の間にベツレヘム近くの修道者独房で書かれた。当書簡の名宛人であるパンマキウスは、聖人として崇拜されたローマの元老院議員である。青少年期はヒエロニムスと共に修辞学校へ通った。385 年、聖パウラの次女パウリナと結婚する。397 年、パウリナが死んだ後、修道士になり、聖ファビオラと共に、ローマへやって来る貧しく病んだ巡礼者たちのために旅人接待所を建てた。ヒエロニムスとその旧友ルフィヌスとの間の論争を何度も仲裁しようとしたが、その試みは失敗に終わった。399 年にヒエロニムスにオリゲヌスの『諸原理について』(*De Principiis*)を翻訳するよう依頼したり、ヒエロニムスの聖書の註解の多くはパンマキウスに捧げられたりするなど、ヒエロニムスとの関わりが深い。409 年頃ローマで亡くなった。

ヒエロニムスの書簡は、扱うテーマの多種さ、内容の高度で豊かな学術性、またその美しい文体から、単なる私信を超えた様々なジャンルの学術的作品と見なされた。彼自身の思想だけではなく、教会内の分裂抗争など崩壊寸前だったローマの世相も伝える、初期キリスト教時代の証言ともいえるべきの貴重な史料でもある。書簡集であるが単なる個人宛ての私信と出版を意図された作品の区別がなく、手紙の名宛人以外の一般に向けて書かれた論説も多く含む。

当書簡は、カトリック教会などでは「通訳や翻訳者の守護聖人」とされてきたヒエロニムスの作品である上、「翻訳の最高種について」と付けられたその副題から、通訳翻訳学史上、最も重要な西欧初期の作品の一つとして古代から現代に至るまで様々な学者に採り上げられた。しかし、これまでその和訳はなされたことはなく、翻訳学入門書などでもその英訳からの重訳が一部紹介されるに留まっていた。作品では、キケロ (Cicero) が主に『弁論家の最高種について』(*De Optimo Genere Oratorum*. 訳者による和訳は『翻訳研究への招待』(日本通訳翻訳学会篇) 12 号、2014 年、p.173 ~ 190) で、現代の翻訳論にも繋がる概念である「逐語訳」か「意味対応訳」かのどちらが良いかについての問題を提起したが、その議論をヒエロニムスも取り上げて発展させている。ヒエロニムスが 5 節で引用している通り、キケロは翻訳の際、「逐語的に訳す (言葉から言葉へ翻訳する) ことが必要であると考えたのではなく、全体的な語法とその効力を保持した。」その基本的姿勢をヒエロニムスは踏襲した上で、具体的にどのようにして聖典等を翻訳したかを、本作品は説明するものである。

ヒエロニムスが当書簡を書いた目的は、彼がエピファニオス司教が書いた書簡をギリシア語からラテン訳したことについて、敵対者らが誤訳をしたか故意に内容を変えたと批判してきたため、それに対して自身が弁明することであった（1節）。その概略は以下の通りである。

1) この翻訳はエウセビウスのために行ったのであり、たまたま翻訳が盗まれて公表されてしまったのであって、元々それを意図したものでも認可したものでもないこと。多種の例を挙げ、盗みや裏切りは犯罪であること（2～3節）。

2) 自身は逐語訳しなかったこと、そしてそのことについて論敵に攻撃されていること（2節）。

3) 敵対者らは、批判するのなら訳者ではなく、書かれた内容について責任のある者（この場合、エピファニオス司教）を批判すべきであること（4節）。

4) 彼の翻訳の基本方針はキケロなど翻訳の伝統に則ったもの、つまり「意味対応訳（意識）」であり、翻訳の際に原文の内容を改竄したり加筆などしておらず、彼が訳したエウセビオスの『年代記』の序文でもそう書いていること（5節）。ヒラリウスの翻訳作品を例に挙げ、キリスト教の教父たちもこの方針に従っていること（6節）。新約聖書の著者らも旧約聖書の引用の際にこの方針に従い、時折、七十人訳から外れてヘブライ語原書の方に従っていること（7～9節）。人間であれば過ちがあつて当然であること（7、12節）。新約聖書にも不正確な箇所があるが、自由な翻訳によるものであって、それは許容されていること（10節）。また、ヘブライ語原書と比較すると、七十人訳にも加筆や削除箇所が見られるため、この方針は七十人訳でも公認されており、音節や語源までを気にするアクィラのような翻訳法は却下されるべきであること（11節）。

以上のように、ヒエロニムスは自身の翻訳法に関する弁明を述べた後、再び、この書簡を書いた理由を、2節の2)の議論に戻り、逐語訳は文学的な視点では許容できないからとする。使徒らが簡素な言葉を用いることについては、この場合、翻訳論議からは除外する（12～13節）。以上の理由で、ヒエロニムスは友人パンマキウスに、ギリシア原文テキストと彼の訳文を自身で読み比べてみて、彼の翻訳を正しく評価してくれるよう頼み、この書簡を終える（13節）。

このように、ヒエロニムスは古典文学（5節）、教会文学（6節）、新約聖書の福音伝道書（7～10節）など多様な翻訳作品から翻訳の実践例を引用しながら、自身の翻訳法が意味対応訳であること、権威ある七十人訳や新約聖書ですら原文から離れていたり、加筆や削除箇所があること、しかしそれは誤訳というわけではなく、異なった言語で意味を正確に表すためにはやむを得ない措置であることなどを、敵対者への反論の論拠とした。

作品で言及される主要な聖典は、旧約聖書のヘブライ語原典、その最古の訳とされるギリシア訳の七十人訳聖書 (*Septuaginta*. 本作品ではウルガータ版 *Vulgata Editio* とも表される)、マタイ、マルコ、ルカ、ヨハネの各福音書記者らによる四福音書などから成るギリシア語で書かれた新約聖書で、それに旧約聖書および新約聖書の古ラテン語訳が加わる。当時、イタラ (*Itala*) 訳聖書 (前2世紀成立) と呼ばれる旧約聖書の古ラテン訳は存在したが、そのほとんどがギリシア語の七十人訳聖書からの重訳であり、ヘブライ語原文から直接訳されたものではなかった。また、ギリシア語訳の逐語訳であるため美しいラテン文でもなかった。七十人訳の誤訳をそのままラテン訳もしていた (7節参照)。こうした旧約・新約聖書の古ラテン訳には様々な版があり不統一で混在していた。そのためヒエロニムスは、時のローマ教皇ダマスス一世の命により、旧約聖書については、ヘブライ語の聖書外典 (*Apocrypha*) と峻別した旧約聖書のヘブライ語原典を「ヘブライ語の真理 (*Hebraica veritas*)」と呼び、当初七十人訳やオリゲネスのヘクサプラ (*Hexapla*) も参照しつつ、パレスティナのユダヤ人らの助けも借りて、ヘブライ語原書から直接ラテン語に翻訳した。本作品および彼のラテン訳聖書の序文などでも度々、旧約聖書原典が「ヘブライ語の真理」の名で呼ばれている。

またヒエロニムスは、新約聖書の四福音書については、ギリシア語原書を古ラテン語訳と照合して誤った部分を訂正し、それまでのラテン訳聖書を改訂した。その際、古ラテン語訳聖書のように逐語訳ではなくキケロが提唱した意味対応訳を採用した。結果、聖書の意味内容が一層明晰になり、ラテンの文体も華麗で自然なものとなり、人々に理解されやすくなった。こうして成立したヒエロニムスによる聖書のラテン語訳が「ウルガータ聖書」(紛らわしいが本作品での *Vulgata Editio* は七十人訳を指すのであって、ヒエロニムスのラテン訳聖書はこの書簡が書かれた時点ではまだ完成していない) であり、ヒエロニムスの最大の功績とされる。ヒエロニムスの訳業は徐々に西方教会で認められ、それに他の訳者らにより手が加えられて最終的にウルガータ聖書が成立した。1546年のトリエント公会議により、このウルガータ聖書がローマ・カトリック教会で公式に用いられるようになった。学識と語学力にすぐれたヒエロニムスならではの翻訳の功績は、後世にマルティン・ルターによる聖書のドイツ語訳などにも受け継がれ、今日のようにキリスト教聖典としての聖書が様々な言語で翻訳され、知識層のみならず一般人にも広く浸透する礎となった。

だが、ヒエロニムスのこの訳業は、当時、大きな論争を引き起こした。それまで七十人訳聖書はキリスト教徒間で権威ある正典とされ (11節参照)、ヒエロニムスはヘブライ語聖書のラテン訳の際に七十人訳も参照したものの、これを差し置いて一般の言葉で訳したものを公表するのは罰当たりな行為に等しく、それに対してアウグスティヌスの反発

も招いた。だが、ヒエロニムスは度々、旧約聖書のヘブライ語原書と七十人訳間の内容の違いを指摘しているし、新約聖書著者の福音書記者らや使徒らについても、彼らが引用した旧約聖書の文章を例に挙げて、彼らは旧約聖書と同じ内容を書いているが原書とは全く異なる言葉や語順を用いていること、すなわち福音書記者の文章は、ヘブライ原書のどこちないギリシア逐語訳文ではないことを指摘し、逐語訳を追求しないヒエロニムス自身の訳業を正当化している（7～11 節参照）。

その一方で、ヒエロニムスは聖書の翻訳の際には、できるだけ逐語訳をするよう努めたことを言明し（5 節）、決して聖書の意味内容や表現を変造したわけではなく、自身は変造者と呼ばれる云われはないと訴えている（2 節と 13 節）。聖書の意味内容を変造することは、当時、異端者としてキリスト教会を追放されかねない行為であったからである。ところが、ヒエロニムスは教会に対しては追放されないよう表向きそのような体裁を取りつつも、実際の聖書翻訳作業では意味対応訳に努めたとされる。例えば Condamin は、原典では同じ表現の繰り返しである箇所を、ヒエロニムスは翻訳の際に言葉を変えて訳していることを指摘している（Condamin, A., *Les caractères de la translation de la Bible par Saint Jérôme, Revue des Sciences Religieuses* 2 (1911), p.434; Bartelink p.4 参照）。創世記 1 章で 9 回も現れる「神は言われた」という表現を、ヒエロニムスはいつも同じように訳していない。“dixitque Deus” (1:3, 29), “dixit quoque Deus” (1:6, 24), “dixit vero Deus” (1:9), “et ait” (1:11, 26), “dixit autem Deus” (1:14), “dixit etiam Deus” (1:20) と少しづつ表現を変えている。また、Hoberg は、ヒエロニムスのダニエル書の翻訳法について以下のようにコメントしている。“Hieronymus non solum particulas usitatas non semper similiter interpretatur, sed etiam alia vocabula sive nomina sive adjectiva sive verba diversis vocibus reddere solet.”「ヒエロニムスは慣用句をいつも同じように訳さずに、名詞や形容詞や動詞などの原語をさまざまな語で翻訳していた。」（Hoberg, G., *De S. Hieronymi ratione interpretandi*, Diss. Münster, 1886 (Bonn), p.20; Bartelink p.4 参照）従って、実際は、ヒエロニムスは一般的な文書に限らず聖書や聖典も、場合によっては、意味内容を大幅に変更しない範囲で、臨機応変に自由な訳語を用いて解りやすいかつ美しく自然な文で翻訳していたのである。

＜ヒエロニムス著「翻訳の最高種について」全訳＞

1. 使徒パウロが王アグリッパの面前に、（自身に対して行われた刑事）告発に答弁するため（現れた）。その際、聴衆にそれが理解されるように望みつつ、また、訴訟の勝利を確信するや否や、彼は喜んで、（自己の弁護を）以下のように話し始めた。「王アグリッ

パ殿、私は幸福に思います。なぜなら、特にユダヤ人のあらゆる慣習と諸問題に精通されているあなた様の御前で、本日、私はユダヤ人から告発されている全ての内容について弁明させて頂けるからです。」[使徒言行録 26:2～3]（パウロは）かのイエスの言「じっと聴いてくれる人々の耳に向かって話す者は幸福である」[シラ書（集会の書）25:9]を読んでいた。陪審員の知性が理解できる分だけ、話し手の言が成功することを彼は知っていたのである。このため、少なくともこの件に関しては、私自身は幸福であると思う、なぜなら教養の高いあなたの耳元で、私に無知さと偽りをぶつけてくる未熟な言葉を発する舌（を持つ者たち）に、私はこれから答弁するからである。外国語（ギリシア語）の手紙を正確に翻訳する能力が私には無いか、私がそう望まなかったとその舌どもは批判する。それらの批判の一部は間違っているし、もう一部は言い掛かり（*crimen* 犯罪）だ。私を糾弾する者が、何でも話せるほど弁が立つことと、何をやっても許されると考え、罰せられないのをよいことに、ちょうどその者がエピファニオス司教を非難したのと同じように、あなた方の面前で私をも非難しないように。私はこの手紙を、物事の本質（*rei ordinem*）を教えるため、あなた自身と、我々が愛するに値する他の人々に、あなたを通じて送った。

2. およそ二年前、前述のエピファニオス司教が（エルサレムの）ヨハネネス司教に手紙を送った。その教義について彼を批判し、その後、穏やかに悔悛へと誘うためであった。その手紙の写しはパレスティナ中で、著者の長所か文章の優美さゆえに競って奪い合うように求め読まれた。我々の小修道院にクレモナのエウセビウスという、彼の郷里ではそこそこ名の知られた人物がいた。この手紙は多くの人々に噂され、その教義と文体の純正さゆえに、教養のある人々もそうでない人々も等しくその手紙を絶賛していたので、この人物はその手紙を自身のためにラテン語に翻訳し、一層明確に理解しやすくなるよう説明すべく、私に熱心に懇願し始めた。というのも彼はギリシアの言葉には全く無知であったから。私は彼の望み通りに行った。書記を呼び寄せると、急いで素早く（手紙のラテン訳を）書き取らせた。頁の端に各章が内含する意味を簡潔に書き留めながら。彼は彼自身の為だけに私がそれを行うようひたすら頼んだので。そして、私の方もそれをする代わりに、彼にはその写しを家で保管し、たやすく公にしないよう念を押した。1年半が過ぎ、新たな奸計により、上述の翻訳が彼の手紙箱からエルサレムへ、とうとう「移住した」。すなわち、ある偽修道士が、金を受け取ってか — それははっきりと推測されうることだ —、あるいは金目的ではない悪意からなのか — 彼を買収した者が我々にそう信じさせようとしているが無駄なことだ —、とにかくそのエウセビウスの手紙を盗んでしまったのだ。そして、そうすることで自らがユダ、つまり裏切り者となってしまった。敵どもに私に対して吠え立てる機会を与えてしまったのだ。敵どもは無学な者たちの前で私を文書偽造者呼ばわりし、私が言葉の代わりに言葉を置き換えて（*verbum pro verbo*）翻訳せず、

「尊敬する師」と書くべきところ「最も親愛なる人」と書いてしまい、口に出すのも忌まわしいことだが、悪意ある翻訳により（ヨハネス司教の）「尊師（最も尊敬する師）」の称号を翻訳したがいなかったと主張するのだ。こうした取るに足らない点が私の罪だという。

3. だが最初に、私とその翻訳について答える前に、（私の）賢慮を悪巧みと呼ぶ者どもに私は問い質したい。どこからお前たちはその手紙の写しを手に入れたのだ？ 誰が与えたのだ？ 不正に手に入れたものをどんな顔をしてお前たちは公表するのだ？ 自宅の壁や手紙箱の中ですら自分の秘密を隠しおおせないなら、人のいる場所のどこが安全だろうか？ もし私が陪審員の席の前で、お前たちに対しこの告発を強行するなら、私は（お前たち）被告人をこの法の前に屈服させてやろう。その法とは、国庫の益に関する訴訟においてですら密告者らに罰を定め、裏切り（の情報）を受け取りながら、この裏切り者を有罪とするものである。というのも、（密告者の情報が与える）利得はもちろん歓迎されるが、（密告者の）動機には不快感が示されるからである。長老ガマリヘルがひどく敵視していた執政官のヘシュキウスを、テオドシウス帝が少し前、（ガマリヘルの）書記をそそのかしてその手紙を奪ったとの廉で死罪に処した。我々が古い歴史で読んだことであるが、ある学校教師がファリスキ人の子どもたちを裏切ったが、ローマ市民たちはこの恥ずべき（手段で得られた）勝利を受け入れず、縛られて子どもたちに引き渡され、彼が裏切った人々の元へ送り返された。エピルスの王、ピュッルスが陣営で傷の治療を受けていた時、王の医師は王を暗殺しようとしたが、ファブリキウスは王が裏切りによって殺されるのは非道だと考え、（その誘いに乗る）どこかむしろ裏切り者（の医師）を拘束してその主人の元へ送り返したのであった。たとえ（被害を受ける）相手が敵であっても、罪は罪として認めなかったのである。この（不文律）を公法が保護し、敵が守ってきて、それは戦場や剣が交じり合う最中でさえも遵守されてきたが、修道士やキリスト教の司教の間では危険に晒されていた。彼らのうちの誰かに、眉をひそめ、指をパチンと鳴らして敢えてこのように言い放つ者がいるだろうか？ 「もし修道士が賄賂を使ったとしたら、もし誘惑したならどうだろうか？ 彼は自分に益することを実行したまでだ。」驚くべき犯罪の擁護だ。まるで盗賊や盗人、海賊が自分に益することを行わないかのようだ。確かに、アンナスとカイアフアが不幸なユダに正道を踏み外すよう仕向けた時、彼らは自身に益すると判断したことを行っただけだ。

4. 私のノートには不用なことで何でも書き留めたいと思う。また、聖書に註解を付け、私を中傷する者らに反撃し、私の苛立ちを鎮め、私が慣用句を用いる訓練をし、いつか戦う日のためにいわば磨き上げた矢を保管しておきたいと思う。私は私の考えを公表しない間は、それらは単なる誹謗中傷であって告発ではない。それどころか、一般に知

られていない事柄は誹謗中傷ですらない。お前（私の批判者）は私の奴隷を買収し、私の家来をそそのかすかもしれない。そして、寓話で読まれているように、お前は黄金によって（黄金の雨に姿を変えて）ダナエ（の塔の内部）へ侵入し、お前がやってきたことを隠して私を文書偽造者呼ばわりするかもしれない。だが、お前はそうやって私を告発することで、お前が私に対して告発しているよりもはるかに大きな罪を、お前が（犯していることを自ら）認めるだろう。お前を異端者として批判する者もいれば、教義の歪曲者として批判する者もいる。（それに対して）お前は沈黙する。お前は敢えて答えようとせず、翻訳者を罵り、たかが音節に対して批判をでっち上げ、お前が誹謗している者が黙っている時には、お前の自己弁護には非の打ち所がないとお前は考えている。私が翻訳する際に何か間違ったか、飛ばしてしまったと想像してみよ。お前の訴えの軸全体がこんな（どうでもよい）点に関わっている。これがお前の自己弁護だ。だから、もし私が悪い翻訳者であるなら、お前は異端者ではないのか？ お前が異端者であると私が知っているとは言わないでおこう。それは、お前を非難した者が、すなわちこの手紙を書いた者（エピファニオス司教）が知っていることなのだ。しかし、他者に非難されている者が他者を非難することは、極めて愚かなことだ。体の至る所に傷を受けているのに、大人しく眠っている者を傷つけることで慰めを得ようとするとは。

5. これまで、手紙（の翻訳）については何かしら変更を加えてしまい、率直な（逐語的な）翻訳であっても間違ってしまう得るが、それは罪ではない、ということを私は語ってきた。実に、手紙自体の意味内容は変更されておらず、付け足された内容もなく、ある教義が捏造されたわけでもなく、（テレンティウスが言うように）「分かっているふりをして、その実何も分かっていることを彼らは示している。」[『アンドロスの女』前口上17] つまり、他者の無知をあげつらおうとするなら、それは自分の無知を晒しているのと同じことなのだ。私が認めるだけでなく、声高に公言したいのは、私がギリシア語を翻訳する際、語順さえも神秘的な聖書を除いて、言葉から言葉へ（*verbum e verbo*）ではなく、内容から内容へ（*sensum de sensu*）翻訳したということである。この作業の際には私はキケロを手本とした。キケロはプラトンの『プロタゴラス』と、クセノポンの『家政論』、それにアイスキネスとデモステネスが互いに対して行った最も素晴らしい二つの弁論を翻訳した人物である。キケロがそれらの翻訳を行う際、ギリシア語独特の表現を自国特有の表現を用いて表すために、どの程度省略し、付け加え、変更したかについては、今は言及しないでおく。それらの弁論の序文で述べられている、訳者自身による言（次に引用する）だけで私には満足だ。「私は私自身には必要ではないが、学生にとっては有益である仕事に取り掛かるべきであると考えた。アッティカ出身の最も雄弁な二人であるアイスキネスとデモステネスの、互いに対して述べられた、非常に卓越した弁論を私はそれ

ぞれ翻訳した。だが、私はそれらの弁論を翻訳者としてではなく、あくまでも弁論家として訳した。つまり、内容は同じままで、その形を（ラテン語の）表現にすることで、我がローマ人の語用に合った表現を用いて翻訳したのである。その際、私は言葉の代わりに言葉を置き換えて翻訳することが必要であると考えたのではなく、全体的な語法とその効力を保持した。なぜなら、私は読者にそれらの語を数えて伝えるのではなく、いわば重さを量って伝えるべきだと考えたからである。」[『弁論家の最高種について』13～14] この結論部で再びキケロは語る。「私の望み通り、彼らの長所の全てを援用しつつ彼らの弁論を翻訳するとしよう。つまり、我々の慣用的語法から外れない範囲で、その長所、つまり意味内容とその表現と、内容の順序と語彙に従いながら、もしこれら全てがギリシア語の（逐語）訳でなければ、少なくともそれらが同じ種類のものであるよう努力しよう。」[『弁論家の最高種について』23] 明敏で博識な人、ホラティウスも『詩論』で、熟練した翻訳家に同じことを助言している。「忠実な翻訳家（のように）言葉の代わりに言葉を置き換えて訳さないよう気を付けよ。」[133] テレンティウスはメナンドロスを、プラウトゥスとカエキリウスは古代の喜劇詩人（たちの作品）を翻訳した。彼らは単語ごとの訳に固執しているだろうか。むしろ翻訳する際に典雅さや優美さを保っているのではないか？ お前たちが翻訳の忠実さと呼んでいるもの、これを教養ある人々は「有害な細部へのこだわり（熱意）」(κακοζηλίαν : Marlowe および Bartelink によるテキストの修正に従う) と呼ぶ。およそ二十年前、私はこのような（こだわりを持った）人々から教育を受け、当時、彼らと同じ誤りにより騙されて、実際、お前たちから私が非難されることになろうとは夢にも思わなかった。私がカエサレアのエウセビオス著『年代記』をラテン語に訳した時、とりわけ次のような序文を書いた。「外国の文を追跡する際、どこかで離れてしまわないようにすることは困難である。また、立派に書かれている原文と同じ優美さを、訳文でも保持するのも難しい。各単語が持つ固有性により何らかの意味が示される（各単語はそれぞれ、それ固有の意味を持つ）。私はそれを表現できる言葉を持たない。そして、意味内容を正しく訳そうとするなら、長々しい回りくどい表現を（使っても）、短い原文でさえ殆ど訳しきれない。これに倒置法による語のねじれ、格の相違、成句の多様性が加わる。最後に、いわゆるその語が持つその国独特の語法がある。もし私が逐語訳をしたら、訳文が奇妙に聞こえてしまう。もし私が必要に駆られて語順や言葉遣いを変えてしまったら、翻訳者としての職務から遠ざかってしまうように見えるだろう。」これ以上続けるのが退屈なことを長々と論じてしまったが、以下のことも私は付け加えた。「もしある者には、原語の魅力が訳文で再現されているように見えないなら、その者にはホメロスをラテン語で逐語的に訳させてみよう。否、むしろこう言った方がいいだろう。その者にはホメロスを散文体の自国語で訳させてみよう。すると、語順がおかしく見えるだろうし、この上なく能弁

な詩が、何を言っているのか殆ど分からないものになってしまうだろう。」

6. 私の文章の典拠が少な過ぎるということのないよう — 私はただ、私が青年時代から常に、言葉ではなく内容を翻訳してきたことを立証したいだけだ —、上述の例に加えて（エジプトの）聖アントニウスの生涯を記述した著作の短い序文を、朗読して考えてみて欲しい。「ある言語から違う言語へ逐語的に翻訳された文は、その意味内容を隠してしまう。それはちょうど作物が繁茂し過ぎると、その成長を妨げてしまうがごとくである。というのも、ある文章が格や成句に服従してしまうなら、短い文で明示できるであろうことも、長い回りくどい表現でさすらってしまい、殆ど説明できなくなるからである。」このような失敗を私は避けつつ、あなたの求めに応じ、聖アントニウスを原文の言葉に何か訳し欠けることはあっても、意味内容については欠けたる所は何もないように翻訳した。他の者らには音節と字句に拘泥させておき、あなたは意味内容を追求しなさい。もし意味内容に応じて翻訳した人物全員の典拠を出そうとするなら、私には時間が足りない。差し当たっては信仰告白者ヒラリウスの名を挙げておくだけで十分である。このヒラリウスはヨブの説教と数多くの聖歌をギリシア語からラテン語に訳した。そして、退屈で眠気を誘うような逐語訳に固執せず、未熟者らがやる退屈な翻訳を行うことにより自らの首を絞めなかった。まるで征服者が特権を行使して捕虜を自分の母国語へと引き込むように、ヒラリウスは意味内容に移した。

7. 七十人訳聖書の翻訳者と福音書記者と（十二人の）使徒たちが同じことを聖書（の翻訳）でも行ったので、世俗の他の人々と教会の人々が（この方法で翻訳した）のは驚くことではない。マルコによる福音書で主イエスが「タリタ、クミ」[5:41] と語っているのが読める。そして、すぐにこう付け加えられている。「それは、少女よ、私はあなたに言う、起き上がりなさい、と翻訳されている。」福音書記者を「私はあなたに言う」という文を翻訳の際に付け加えたという偽りの廉であなたがたは非難せよ、なぜならそれはヘブライ語版ではただ「少女よ、起き上がりなさい」とあるからである。この文の語気をより強めて（ἐμφατικώτερον）呼んで命令するというニュアンスを表すため、マルコは「私はあなたに言う」と付け加えたのである。再び、マタイによる福音書では、三十枚の銀貨が裏切り者のユダによって返され、陶工の所有地がその銀貨で買われた際について、以下のように書かれている。「こうして預言者エレミヤの言に基づき、書かれたことが成就したのである。エレミヤが言うには、彼らは値をつけられたもの、すなわち、イスラエルの子息らが値をつけたものの代価として三十枚の銀貨を受け取り、主が私にお命じになったように、陶工の所有地の代価としてその金を与えた。」[27:9～10] この文はエレミヤ書には全く見当たらない。だが、ゼカリア書 [11:12～13] にはある。ただし、語彙は大きく異なるし、語順も全く異なる。実際、ウルガータ版（七十人訳）は以下の通りである。

「私は彼らに向かって次のように言おう。『もしそれがあなたたちに良いと思われるのなら、私に賃銀を払いなさい。あるいは（もしそうでなければ）それを拒否しなさい。』そして、彼らは私の賃銀として、銀貨三十枚を量った。主は私に言われた。『それらの賃銀を炉の中へ置きなさい。そして私が彼らによって試されたように、試されているのかよく考えてみなさい。』そこで私は銀貨三十枚を持ってきて、これを主の宮の炉へ投げ入れた。」七十人訳聖書の訳が、福音書記者の証言と異なっているのは明らかである。しかし、ヘブライ語原典では意味は同じであるが、語の順序は異なり、（その意味も）ほとんど一致しない（逆である）。「そして、私は彼らに以下のように言った。『もしあなた方の目にそれが良く見えるのなら、私の賃金を持ってきなさい。もしそうでなければ、やめなさい。』そして、彼らは私の賃金として、銀貨三十枚を量った。主は私に言われた。『その賃銀を彫像鑄造工の前へ投げなさい。私が彼らによって付けられたそのふさわしい値を。』そこで私は銀貨三十枚を持ってきて、これを主の宮の彫像鑄造工の元へ投げた。」彼らは使徒マタイを訳の偽造により批判するだろう、なぜならそれはヘブライ語版とも七十人訳の訳者らによる版とも一致しないからである。また、なお悪いことには、マタイが名前を間違って、ゼカリヤと書くべき所をエレミヤと書いてしまったことも批判されるだろう。だが、このキリストの従者（マタイ）について、このように語ることはふさわしくないであろう。マタイは単語や音節を追及するのではなく、意味内容を教義として表すことに心を配っていたのである。福音書記者ヨハネがヘブライ語の真理（ヘブライ語原典）から引用した同じゼカリヤ書の典拠を我々は見てみよう。「彼らは、自分らが突き刺したお方を見つめるであろう。」[ヨハネによる福音書 19:37. ゼカリヤ書 12:10 も参照] この代わりに、七十人訳では「そして彼らは私を見つめるであろう、なぜなら彼らは（私を）嘲笑ったので。」(καὶ ἐπιβλέψονται πρὸς με, ἀνθ' ὧν ἐνωρχήσαντο) とある。これをラテンの人々はこう訳した。「そして、彼らは私を見つめるであろう、彼らが嘲笑ったか愚弄したもののゆえに。」以上の三つの版、つまり福音書記者、七十人訳と我々のラテン語訳（古ラテン訳）は互いに異なっている。だが、訳語の相違は、意味内容（spiritus）の同一性と合致する（言葉は違っていても意味内容は同じである）。マタイによる福音書でも、主が使徒の逃亡を予言するのを我々は読むことができる。またこのことはゼカリヤ書の典拠でも立証できる。「（イエスは）言う、『私は羊飼いを打つであろう、すると羊らは散らされるであろう』と書かれている。」[マタイによる福音書 26:31. ゼカリヤ書 13:7 も参照] だが、七十人訳とヘブライ語原典では大きく異なっている。なぜなら、福音書記者が考えるように、これは神自身の口から語られたことではなく、父なる神に懇願する預言者の口から語られたことだからである。「羊飼いを打て、すると羊らは散らされるであろう。」ここで、誰かある賢明な人々も考えるように、福音書記者が、預言者の言葉が神の口から発せられたものである

と、恐れ多くも言い放った罪の張本人であると私は考える。上述の福音書記者が書いていることであるが、主の使いの忠告に従い、ヨセフは幼子^{おきなこ}とその母親を連れて、エジプトに入った。そしてそこでヘロデが亡くなるまで留まった。それは、主が預言者を通じて「私はエジプトから私の息子を呼び出した」と語られたことが成就されるためである [マタイによる福音書 2:14～15]。この文はラテン語の写本には無いが、ホセア書のヘブライ語の真理には以下のように書かれている。「イスラエルが幼子であった時、私は彼を愛した。そして、私はエジプトから私の息子を呼び出した。」[ホセア書 11:1] この同じ個所で、七十人訳はこの文の代わりに以下のように訳した。「イスラエルが幼い時、私は彼を愛した。そして、私はエジプトから彼の息子たちを呼び出した。」これらの訳者は全く跳ね除けられるべきではなかろうか、なぜならキリストの秘奥に最も大きく関わる箇所を、彼らは異なって（変えて）訳したからである。あるいは、ヤコブの考えでは、なにぶん人間が話す事であるので、むしろ（翻訳者らを）容赦してやるべきではないか。「私たちは皆、多くの過ちを犯すものである。もし、言葉に過ちの無い人があれば、そういう人は、全身をも制御できる完全な人である。」[ヤコブの手紙 3:2] 以下は実際に同じ福音書記者の書で書かれていることである。「彼（ヨセフ）はナザレという町に行って住んだ。これは預言者たちを通して、『彼はナザレの人と呼ばれるであろう』と言われていたことが、成就されるためである。」[マタイによる福音書 2:23] 言葉たくみな人々（λογοδαίδαλοι）と、扱われているあらゆる事柄について辛口な批評家たちに、彼らがどこでこれを読んだのか答えさせよう。そして、それがイザヤ書にあるのを彼らに解らせよう。さて、我々が読んで翻訳した箇所では（以下のような記載がある）。「エッサイの根から一つの若枝が生えて、その根から花芽が立ち昇るであろう。」[イザヤ書 11:1] ヘブライ語の成句（ιδίωμα）では以下のように書かれている。「エッサイの根から一つの若枝が生えて、その根からあるナザレ人（イエス）が成長するであろう。」なぜこの「ナザレ人」という語を七十人訳は省略したのか？ 言葉の代わりに言葉を置き換えて訳することができないのなら、神秘を隠すか無視することは神聖冒瀆になる。

8. 他の例を見よう。この手紙が短いので、個々の点にこれ以上長く留まっていることは許されないからである。マタイが次のように言っている。「これら全てのことが起ったのは、主が預言者を通じて語られたことが成就するためである。『見よ、乙女が身ごもって男の子を産むであろう。そして、その名をインマヌエルと人々は呼ぶであろう。』」[マタイによる福音書 1:22～23. イザヤ書 7:14 も参照] これを七十人訳はこのように翻訳した。「見よ、乙女が受胎して男の子を産むであろう。そして、その名をインマヌエルとあなた方は呼ぶであろう。」もしこの訳語にけちをつけるなら、確かに「身ごもって (habebit)」と「受胎して (accipiet)」は同じ語ではないし、「人々は呼ぶであろう (vocabuit, 注:

vocabunt も)」と「あなた方は呼ぶであろう (vocabitis)」も同じ語ではない。さらに、ヘブライ語で次のように書かれているのが読める。「見よ、乙女が身重になって (concipiet) 男の子を産むであろう。そして、その名をインマヌエルと彼女は呼ぶであろう。」男の子を (インマヌエルと) 呼ぶのは、不信心で告発されたアハズではなく、主の存在を否定することになったユダヤ人らでなく、男の子を身ごもり、産んだ乙女自身なのである。同じ福音書記者の書で以下が読める。ヘロデは東方の三博士の到来に取り乱し、律法学者らと祭司らを集めて、キリストはどこで生まれるのか彼らから尋ねた。彼らがこう答えた。「ユダヤのベツレヘムです。預言者によりこう記されているからです。『そして、ユダの地、ベツレヘムよ、おまえはユダの指導者らの中で、決して最も小さいものではない。おまえの中から一人の指導者 (dux) が出来て来て、わが民イスラエルを統治するであろう。』」[マタイによる福音書 2:5～6・ミカ書 5:1 参照] この文はウルガータ版 (七十人訳) で以下のように書かれている。「『そして、エフラタの故郷、ベツレヘムよ、おまえは何千というユダの中ではささやかだ。(が、) ある者がおまえの中から私のために出て来て、イスラエルの長 (princeps) となるであろう。』」マタイによる福音書と七十人訳の言葉と語順の違いがいかに大きいのか、ヘブライ語原典を読めばあなたはもっと驚くだろう。それには以下のように書かれている。「そして、エフラタ、ベツレヘムよ、おまえは何千というユダの中では小さい。(が、) イスラエルの統治者 (dominator) となる者が、おまえの中から私のために出て来るであろう。」福音書記者によって述べられたことを一語ずつよく考えてみよう。「そして、ユダの地、ベツレヘムよ。」「ユダの地」の代わりにヘブライ語では「エフラタ」とある。他方、七十人訳では「エフラタの故郷」とある (この箇所は “Et pro,” を削除した Bartelink に従う)。また、福音書記者では「おまえはユダの指導者たちの中で、決して最も小さいものではない (nequaquam minima)」、七十人訳では「おまえは何千というユダの中ではささやかだ (modicus)」、ヘブライ語では「おまえは何千というユダの中では小さい (parvulus)」とある。少なくともこの箇所では、七十人訳とヘブライ語版が一致しているが、福音書記者訳の内容は、それらの内容とは逆になっている。というのも、福音書記者は、「(ベツレヘムは) ユダの指導者たちの中で小さくはない (non parvulus)」と語ったからである。原文には全く逆のことが書いてあるにもかかわらずである。「おまえは実際小さく、ささやかだ。だが、小さくささやかなおまえの中から私のためにイスラエルの指導者が (dux) 出て来るであろう。」これは次の使徒の言と一致している。「神は、強きものを困惑させるために、この世の弱きものを選ばれた。」[コリントの信徒への手紙 一 1:27] さらに続いて、わが民イスラエルを「統治するであろう者」か「養うであろう者」は預言者の言とは異なっているのは明らかである。

9. 私が以上の文を引用したのは、福音書記者による改変を糾弾するためではなく (そ

のような糾弾は、実際はあの不敬な（異教徒の）ケルスス、ポルフェリオス、ユリアヌスに相応しい）、私を非難する者らをその無知さゆえに糾弾するためである。そして彼らがそれを望もうがいまいが、聖書の中で彼らが使徒らに従わざるを得ないことについて、このただの手紙の中で私にも従うよう彼らを促すためである。ペテロの弟子マルコは自身の福音書を以下のように始める。「イエス・キリストの福音の初め。預言者イザヤの書にこう書かれているように『見よ、私は私の使いをあなたの元に遣わす。その使いはあなたの前にあなたの道を整えるであろう。荒野で呼ぶ者の声がする、＜主の道を整え、その道筋をまっすぐにせよ＞』と。」[マルコによる福音書 1:1 ～ 3] この引用文は明らかにマラキとイザヤの二人の預言者の言から成る。この冒頭部分は次のように語られている。「見よ、私は私の使いをあなたの元に遣わす。その使いはあなたの前にあなたの道を整えるであろう」これは、マラキ書の終わりに書かれている [3:1]。続いて述べられている部分「荒野で呼ぶ者の声がする」などはイザヤ書にある [40:3]。なぜマルコは自身の書の冒頭部でいきなりこう書いたのか。「預言者イザヤの書にこう書かれているように『見よ、私は私の使いを遣わす。』」上述のように、これはイザヤ書では書かれておらず、十二人の預言者のうちの最後のマラキ書で書かれているのに。このちょっとした謎を以下の未熟な推測が解決するように。そして私は間違いをお許し願いたい。このマルコはパリサイ人に話しかける救世主を登場させる。「あなた方は、ダビデが自身とその供の者たちとが食糧がなくて飢えた時に何をしたか、まだ読んだことがないのか。すなわち、アビアタルが大祭司であった時、（ダビデは）神の家に入り、祭司たちの他は食べてはならないことになっているパンを食い尽くしたではないか。」[マルコによる福音書 2:25 ～ 26] 一般に諸王の書と呼ばれているサムエル記を読んでみよう。すると、そこには、大祭司はアビアタルではなく、アヒメレクと書いてあるのがわかる。アヒメレクとはのちに他の祭司たちと共に、サウルの命でドエグによって処刑された人物である。[サムエル記上 21:1 以下, 22:16 ～ 18 参照] 使徒パウロの話に進もう。彼はコリント人宛てにこのように書いている。「もし彼らが（神の知恵を）知っていたなら、栄光の主を十字架につけはしなかったであろう。しかし、聖書に書いてある通り、『目が見ず、耳が聞かず、人の心に思い浮びもしなかったことを、神はご自分を愛する者たちのために備えられた』のである。」[コリントの信徒への手紙 一 2:8 ～ 9] この箇所については、エリヤが証言する黙示録から引用されていると言って、贋作の書（聖書外典）の戯言にその出処を辿られるのが常であるが、実際はヘブライ語原典によるとイザヤ書に次のように見られる。「神よ、あなたを待ち望みし者たちにあなたが備えられたことを、いにしえからこのかた、誰も聞いたことがないし聞き知ったこともなかった。目にしたこともなかった。あなたご自身を除いては。」[イザヤ書 64:3] この箇所を七十人訳は大幅に変更して翻訳した。「いにしえからこのかた、（神である）あ

なたを除いては、神とあなたの真の御業を、我々は聞いたことがなければ、我々の目も見ることがなかった。だが、あなたを待ち望みし者たちにあなたは憐れみをかけ賜え。」この引用の典拠は判明している。そして、この使徒は言葉の代わりに言葉を置き換えて翻訳したのではなく、「換言して (παρὰφρασικῶς)」同じ意味を違う言葉で表現したのである。ローマの信徒への手紙で、使徒パウロは次の文をイザヤ書から引用している。「見よ、私はシオンに、妨げの石と、躓きの岩を置く。」[ローマの信徒への手紙 9:33. イザヤ書 8:14, 28:16 も参照] この箇所はギリシア訳とは異なるが、ヘブライ語の真理とは一致する。なぜなら、七十人訳では逆の意味だからである。「あなた方が妨げの石にも、破滅の岩にも出くわしませんように。」使徒ペトロも、ヘブライ語原書とパウロと一致して、以下のようになっている。「だが、不信心な者たちにとっては、妨げの石と躓きの岩である。」[ペトロの手紙 一 2:7 ~ 8] 以上の引用全体から、使徒らと福音書記者らが旧約聖書の翻訳の際に、言葉ではなく意味を追求したことが明らかである。意味内容が（人々に）理解され得る限りは、彼らは語順や字句については大きくは注意を払わなかったのである。

10. 使徒の一人で福音書記者のルカは、キリストの最初の殉教者であるステファノがユダヤ人の集会で語っているのを以下のように伝えている。「七十五の魂と共に、ヤコブはエジプトに下った。そして、彼自身はそこで死に、我らの先祖たちもシケムに移され、かつてアブラハムがいくらかの銀を出して、シケムの父、ハモルの息子らから買っておいだした墓に葬られた。」[使徒言行録 7:14 ~ 16] この箇所は、創世記では大きく異なって見られる。すなわち、アブラハムがツォハルの息子であるヒッタイト人のエフロンから、ヘブロン近郊にある二重の洞窟（現マクベラの洞穴）とその周辺の土地を、銀四百ドラクマで買い取り、自身の妻サラをそこに埋葬した。[創世記 23:8 ~ 16 参照] また同じ創世記で以下のように見られる。のちにヤコブが彼の妻たちと息子たちを伴ってメソポタミアから戻り、カナンの地にあるシケムの街、サレムの前で天幕を張った。そしてそこで住み着き、彼が天幕を張った土地の一面を、シケムの父ハモルから百頭の子羊で買い取った。そしてそこに祭壇を建て、そこでイスラエルの神を呼び求めた。[創世記 33:18 ~ 20 参照] アブラハムが洞窟を買い取ったのは、シケムの父ハモルからではなく、ツォハルの息子エフロンからである。また、アブラハムが埋葬されたのはシケムではなく、アルボクと（古文書の字が経年で損なわれて）誤って呼ばれているヘブロンである。だが、イスラエル十二支族の長らが埋葬されたのはアルボクではなく、その地がアブラハムによってではなくヤコブによって買われたシケムである。私を中傷する者たちが、聖典で熟考すべきは言葉ではなく意味内容だということを知らうと努め、理解するよう、私はこの小さな謎を解くのを先延ばしにしよう。ヘブライ語原典では詩編第二十一篇（新共同訳聖書では二十二篇）の冒頭が、主が十字架の上で語られた言葉そのままである。「エリ、エリ、レマ、サバクタ

ニ」これは「わが神、わが神、どうして私をお見捨てになったのですか」と訳される〔詩編 22:2, マタイによる福音書 27:46, マルコによる福音書 15:34〕。なぜ七十人訳の訳者らが「私を顧みて下さい」と挿入したのか、私を中傷する者らに釈明させよう。なぜなら七十人訳の訳者らは「神、わが神、私を顧みて下さい、どうして私をお見捨てになったのですか」と訳したので。たとえ二語くらい追加されても、少なくとも意味内容は何も損なわれないと彼らは答えるであろう。もし私が（エピファニオス司教の手紙を）急いで書き取らせたので、少々単語を省略したとしても、（そうすることで）教会の立場を危険に曝したのではないことを彼らに聞き入れさせよう。

11. 七十人訳がどれだけ大幅に付け加えて省略したか、教会の写本の中で短剣符（obelus）とアステリスク（asteriscus）で区別された箇所を、ここでいちいち挙げるのは冗長だ。ラテン訳のイザヤ書の「シオンに種を持ち、イスラエルに家人たちを持つ者は幸福である」〔イザヤ書 31:9 参照〕という節を聞くとヘブライ人はよく嘲笑する。アモス書でも、贅沢三昧な暮らし振りに関する記述の後の箇所「彼らはこれらのことをはかなく消えるものではなく、永続するものと考えていた。」〔アモス書 6:4～6 参照〕を、彼らは少なからず（嘲笑する）。実際は、この文は修辭的な掉尾文で、キケロの雄弁術である。このような権威ある書を我々はどう扱おうか。そこでは、上述の二つの文、そしてこれに似た他の文章が省略されているのに。それを我々が公刊しようとしたら、無数の本を必要とする。上述のように、かつてはかなり多くの省略された箇所はアステリスクで示されるか、我々の翻訳が注意深い読者により古い翻訳と比較されて示した。だが、七十人訳版は教会で正当な地位を占めてきた。その理由は、それがキリスト到来前の最初の版であるからか、あるいは、ヘブライ語原典と矛盾しない個所では使徒らによって用いられたからである。一方、言葉だけでなく、言葉の語源も訳そうと試みた（ユダヤ教への）改宗者で論争好きな翻訳者アクウィラを、我々が追放するのは正当である。すなわち、誰が $\chi\epsilon\upsilon\mu\alpha$, $\acute{o}\pi\omega\rho\iota\sigma\mu\acute{o}\nu$, $\varsigma\tau\iota\lambda\pi\nu\acute{o}\tau\eta\tau\alpha$ （Bartelink 版テキスト採用）（注がれたもの、ぶどうの収穫、輝き）を我々は「注ぐこと、飲酒、輝き」と訳し得るのに、「穀物、ぶどう酒、オリーブ油」と読んだり解釈したりできるだろうか〔申命記 7:13 参照〕。なぜならヘブライ人は冠詞だけでなく接頭辞も持っているので、アクウィラも無粋にも音節や文字ごとに訳してしまい、「（神は）天と地を創造された」と書くべきところ「（神は）天と共にそして地と共に（創造された）」（ $\sigma\upsilon\nu\ \tau\acute{o}\nu\ \omicron\upsilon\rho\alpha\nu\acute{o}\nu\ \kappa\alpha\iota\ \sigma\upsilon\nu\ \tau\eta\nu\ \gamma\eta\nu$ ）（Bartelink 版）と書いてしまったからである〔創世記 1:1 参照〕。それは、ギリシア語とラテン語が到底受け入れられない文である。このような例を、我々は我々の言葉から引き出すことができる。ギリシア語では美しく語られているのに、逐語的に訳されたらラテン語ではおかしい響きとなってしまう成句がどれだけ沢山あることか。また逆に、語順を変えずに訳したらラテン語では好

ましくても、ギリシア語では不快なものになってしまう句がどれだけあることか。

12. だが、貴族のうちで最もキリスト教に忠実な方、キリスト教徒のうちで最も高貴な方よ、この際限がない話題を省略し、(エピファニオスの) 手紙の翻訳のどんな改変について彼らが私を非難しているかをあなたに示すために、私はこの手紙の冒頭部(の訳)をギリシア語の原文と共にここに記そう。彼らがこの一つの罪から他のことも理解できるように。Ἦδει ἡμᾶς, ἀγαπητέ, μὴ τῇ οἰήσει τῶν κλήρων φέρεσθαι (Bartelink 版) — この文を私はこう訳したことを覚えている。「最愛の人よ、我々は聖職者の地位を傲慢に濫用すべきではない。」彼らは言う、「見よ、この短い文の中にどれだけ多くの偽りがあることか。」まず ἀγαπητός (Bartelink 版) は「愛する人」という意味であって「最愛の人」ではない。次に, οἰήσις の意味は「判断」であって「傲慢」ではない。というのも, οἰήματιではなく οἰήσει とあるからである。これらのうち、前者は「増長」を、後者は「判断」を意味する。これら全ては以下のように続く。「聖職者の地位を傲慢に濫用すべきではない。」はあなた自身のもの(創作)だ。これはあなたが言っていることだ。文学の頂点にいる、我々の時代のアリストアルコスよ、全ての作家について意見しているのはあなたか? 私はこれほどまでに長い間、学んできたが無駄であった。そして「(我々は) よく手を鞭から引っ込めた。」[ユウエナリウス『風刺詩』1.15] 港から出航するや否や、我々は座礁した。なぜなら、過ちを犯すのは人間らしいことで、過ちを認めることは賢明な人のすることであるからである。どうかお願いだ、批判者よ、あなたが誰であれ、指導者として私の過ちを正してくれ。そして、単語から単語へ訳してくれ。「愛しい人よ、我々は聖職者の判断に心動かされるべきではない」とあなたは言うべきだった。これはプラウトゥスの雄弁であり、これは俗に言うムーサ(ミューズ)たちの雄弁と比肩するアッティカの優雅さだ。一般の会話でよく使われる諺が私の中に満ちている。「雄牛を格闘技場へ送り出す者は、油も金も失う。」だが、これらに関しては、私を批判する者には罪はない。他人が(悲劇俳優のように)批判者の仮面を被って、悲劇を演じているに過ぎないからである。しかし批判者である教師たち、ルフィヌスとメラニアには(罪がある)。なぜなら彼らは多額の報酬を取っておきながら、彼が何も知らないように教え導いたからである。私はキリスト教徒は誰であれ、話術に未熟であることを非難しない。そして願わくは我々がソクラテスの言葉「私は私自身が知らないことを知っている」と(キロンの言葉と考えられている)他の賢者の言葉「汝自身を知れ」を実行しますように。常に私が崇敬してきたのは、粗雑な多弁さではなく、神聖な単純さ(率直さ)である。自分は使徒の話し方を模倣していると宣言する者は、まず使徒らの生き方における諸徳を模倣すべきである。彼らの話し方が簡素なことは、偉大なる神聖さが容赦していた(神聖さが偉大であるので、彼らの話し方が簡素でも容赦された)。死者の復活が、アリストテレスの三段論法とクリュシッポ

スの深い洞察力を論駁してしまった。もし我々のうちの誰かがクロイソスの富とサルダナパルスの放蕩のただ中にいるのに、ただ自分の無知さ（粗野さ）を自慢するなら、これは滑稽なことだ。あたかもそれは、盗賊や様々な犯罪の犯人全員が雄弁であり、彼らが血濡れの剣を木々の幹（の洞）^{うろ}ではなく、哲学者たちの本に隠しているかのごとくである。

13. 私はこの手紙を、（長さの）限度を超えて書いてしまったが、私の苦痛はまだ（限界を超えるまで）書ききれていない。なぜなら、私は変造者と呼ばれているからだ。私は機織り場の糸巻棒の元にいる（お喋りな）女たちの前でずたずたに引き裂かれている（誹謗中傷を受けている）からだ。それでも、私は仕返することはせず、ただ罪を否定することに甘んじている。私は全てをあなたの判断に委ねる。あなたにはこの（エピファニオスの）手紙をラテン語と同様ギリシア語でも読んで欲しい。そうすれば直ちに、私を批判する者らの哀悼歌と誹謗中傷的な不平を理解するであろう。最愛の友人に教えたことで私は満足している。そしてこの小部屋で隠れて、審判の日を待ち望んでいることでも。もしそれが可能なら、そしてもし私の敵対者らが（私に）そうさせてくれるなら、私はあなたのためにデモステネスとキケロの『フィリッピカ』よりもむしろ、聖書の註解を書きたいと望んでいる。

（訳文終わり）

（謝辞：本研究は、JSPS 科研費 14J40008 の助成を受けたものです。）